2022年（令和４年）３月23日

大阪府日本万国博覧会記念公園運営審議会

「日本万国博覧会記念公園の活性化に向けた新たな将来ビジョン」

答申骨子（案）

Ⅰ　日本万国博覧会記念公園とは何か

**１　日本万国博覧会（1970年大阪万博）**

**２　日本万国博覧会記念公園**

**３　大阪府日本万国博覧会記念公園条例**

**４　日本万国博覧会記念公園の活性化に向けた将来ビジョン**

**（１）万博公園を取り巻く社会状況の変化**

**①2025年大阪・関西万博**

**②SDGs（持続可能な開発目標）**

**③新型コロナウイルス感染症**

**（２）将来ビジョンの振り返り**

**①太陽の塔の内部再生事業**

**②万博の森づくり**

**③万博記念公園駅前周辺地区活性化事業**

Ⅱ　新しい将来ビジョンのフレーム、目標と基本方針

**１　目標と基本方針**

**（１）人間性の尊重を通して、「調和をめざす進歩の精神」とつながる公園**

**（２）レガシーと万博の森が象徴する、「持続可能な未来」とつながる公園**

**（３）「最先端の文化・スポーツの拠点」として、国内外の人や施設とつながる公園**

**２　万博公園の「存在意義（パーパス）」**

**３　公園の管理運営**

Ⅲ　新しい将来ビジョンの目標年次、アクションプラン、達成状況の確認・評価

**１　次の50年をめざして**

**２　アクションプランの作成及びKPIの設定**

Ⅳ　ロードマップ

**１　2030年に向けて**

**２　2040年に向けて**

Ⅰ　日本万国博覧会記念公園とは何か

**１　日本万国博覧会（1970年大阪万博）**

1970年３月14日午前11時、「人類の進歩と調和」というテーマを掲げた、アジア初の国際博覧会である「日本万国博覧会」は、高度経済成長の熱気に沸き立つ、大阪府吹田市千里丘陵の会場で華々しく幕を開けた。

最先端のテクノロジーや多様な文化・芸術が一堂に会し、6,421万人を超える人々が訪れた183日間だけの”夢の近未来都市”。76か国、４国際機関、１政庁、アメリカ３州、カナダ３州、アメリカ2都市・２企業、ドイツ１都市と、史上初めて世界の過半数を超える国々が参加した博覧会であり、第二次世界大戦の敗戦後、アメリカに次ぐ世界第2位の経済大国に昇り詰めた日本が催した、人類交歓の巨大な祝祭の場であった。

会場は、宇宙技術、コンピューター、原子力等の最先端テクノロジーであふれ、最新製品のショールームの場として、電気自転車、電気自動車、携帯電話、テレビ電話、モノレール、リニアモーターカー等がお披露目された。また、当時ほとんどの日本人にとってブラウン管の向こう側の住人だった、外国人との交流の場ともなり、人々は疑似的な海外旅行体験を満喫した。330haに及ぶ広大な敷地には、118ものパビリオンが林立し、アポロ12号が持ち帰った「月の石」が人気を博したアメリカ館、高さ80メートルの吹抜け全体を使い宇宙ゾーンを展開したソ連館等、人気パビリオンには数時間待ちの長い行列ができたが、経済大国の仲間入りを果たした勤勉な国民へのボーナスとして、人々はこれまでに経験したことのないレクリエーションを心から楽しんだのである。

会場を彩ったのは、色どりも豊かなユニークな造形のパビリオン群と、来場者の案内誘導や展示物の説明にあたった、きらびやかなファッションに身を包むホステスたち。そして、国際的な文化交流の場として、多額の予算を投入し、会場のいたるところで展開された前衛芸術群であった。テーマ「人類の進歩と調和」を血の通ったものとした、岡本太郎の「太陽の塔」をはじめ、松本俊夫や横尾忠則が手掛けた、幻想と実在の世界が混在する「せんい館」、人口霧を使った「霧の彫刻」を、中谷芙二子が初めて発表した「ペプシ館」、具体美術協会の吉田稔朗が制作した、「泡のトンネル」が印象的な「三井グループ館」、また、スペースシアターやお祭り広場で流れた、武満徹や一柳慧による哲学的な現代音楽等、1970年大阪万博は、分野を超えた数多くのアーティストによる”アートの実験都市”でもあったのである。

夢のような時間はたちまち過ぎ、同年９月13日午前11時、1970年大阪万博は感動のうちにその幕を閉じた。反権力の立場から万博に反対する「反博派」も含めて、日本中の視線をひとつに集めながら、全世界に”日本”の存在感を力強く印象付けた、万博の閉幕。名誉総裁を務められた皇太子明仁親王の、「万国博は終わりました。しかし、ここで掲げられた人類の進歩と調和という理想の火が、長く人々の心の中に燃え続けることを期待してやみません」というお言葉をあとに残して。

**２　日本万国博覧会記念公園**

1962年に、レイチェル・カーソンが「沈黙の春」において、農薬等化学物質による環境汚染を取り上げた後、1970年大阪万博が閉幕した２年後には、世界中の有識者が集まって設立されたローマクラブが「成長の限界」と題した研究報告書を発表し、このまま人口増加や環境汚染が続けば、100年以内に地球上の成長が限界に達する、と人類の未来に対する警鐘を鳴らし、それを裏付けるかのように、1973年と1978年、二度のオイルショックが世界を見舞った。

このような中、1970年12月、「万国博覧会跡地利用懇談会」は、1970年大阪万博の跡地利用として、「日本万国博を記念する広い意味の『緑に包まれた文化公園』」とすることを決定し、「人類の進歩と調和」を掲げた万博の「有終の美」を飾った。

「人類の進歩と調和」をテーマとする1970年大阪万博の成功を記念するため、太陽の塔をはじめとするレガシーを継承しつつ、広大な博覧会の跡地を、「緑に包まれた文化公園」として整備・運営する計画が、日本万国博覧会記念協会、のちに独立行政法人日本万国博覧会記念機構によって進められてきた。人々は、燦然と輝く1970年大阪万博の記憶を足掛かりとして、また、豊かな緑や文化・スポーツの体験を通して、万博公園を大切に守り、育んでくれたのである。

2014年4月、地域主権・地域経営の観点から、大阪府が、独立行政法人日本万国博覧会記念機構より万博公園を継承し、さらに、2018年10月からは、民間事業者のアイデアや活力を導入し、さらなる魅力創出や賑わいづくり等を図るため、公園内の「公の施設」である「大阪府立万国博覧会記念公園」の管理運営に指定管理者制度を導入した。

【概　　要】

万博公園は、「公の施設」である約130haの自然文化園地区及び約70haのスポーツ地区、並びに府有地を借り受けた事業者が文化・スポーツ施設を管理運営する約58haの周辺地区から構成されている。指定管理者が管理運営する「公の施設」には、自然文化園、日本庭園、文化･スポーツ施設、その他各種公園施設があり、事業者が管理運営する施設には、国立民族学博物館やEXPO CITY、市立吹田サッカースタジアム等がある。

【主な施設】

**太陽の塔**：「人類の進歩と調和」を具現化するテーマ館であった、岡本太郎の巨大な芸術作品。1970年大阪万博、また万博公園のランドマークとして、圧倒的な存在感を示しながら、あたりをへいげいしている。塔内部にあった「生命の樹」、「地底の太陽」の再生を行い、2018年3月から、48年ぶりに内部を公開している。

**EXPO’70パビリオン**：1970年大阪万博40周年記念事業として、出展施設であった旧鉄鋼館を改修し、1970年大阪万博のアーカイブ館としてリニューアルオープン。博覧会の準備から、開幕、会期中、閉幕の状況を、当時の映像や資料等で観覧できる。

**日本庭園**：政府出展施設として、世界に誇る日本の造園技術の粋を披露するとともに、林立する近代建築パビリオンの未来空間と対比する自然、緑の憩いの場を提供した、昭和を代表する名園。上代、中世、近世、現代の作庭様式を一堂に見ることができる「庭園博物館」でもある。

**大阪日本民芸館**：庶民の暮らしの中で培われた「民芸品」の、実用性に即した美しさを広く海外にも理解してもらう意図をもって出展した「日本民芸館」を引き継いでオープン。国内外の陶磁器や染織品等、各地の優れた工芸品を展示している。

**国立民族学博物館**：「太陽の塔」の地下空間に展示するため、世界各地から集めた膨大な民族資料をもとにオープン。民族学に関する調査・研究を行うとともに、世界の諸民族の社会と文化に関する情報を展示し、人々の認識と理解を深めることを目的としている。

**万博の森**：未来都市の”廃墟”に、新たに作り出された森。造成地に多様な自然生態系を再生しようという壮大な実験の森であり、生物多様性を向上させる取組みを続けている。自然観察をはじめ、森を楽しみ、学ぶ場として、自然の中で多様な活動ができる空間である。

**３　大阪府日本万国博覧会記念公園条例**

万博公園を継承するにあたり、大阪府は2013年12月24日に条例を公布し、日本万博博覧会記念協会法及び独行政法人日本万国博覧会記念機構法の「精神（レガシー）」を受け継いで、万博公園のミッションを次のとおり定めた。

**人類の進歩と調和を主題として開催された日本万国博覧会の跡地を、その理念を継承して日本万国博覧会記念公園として一体として管理し、これを緑に包まれた文化公園として運営するとともに、都市の魅力の創出を図る**

**４　日本万国博覧会記念公園の活性化に向けた将来ビジョン**

2015年11月、長年にわたって守られ、育まれてきた公園の魅力を大切にしながら、新たな魅力を創造し、さらに活性化するため、大阪府は、「日本万国博覧会記念公園の活性化に向けた将来ビジョン」を策定した。将来ビジョンでは、目指すべき公園像を「緑と文化・スポーツを通じて人類の創造力の源泉である生命力と感性が磨かれる公園」とし、４つの目標、７つの基本方針を掲げた。

**４つの目標**

①人と自然の調和

②世界への文化と美の発信

③人々の交流と創造

④持続的な魅力の創造

**７つの基本方針**

①シンボルゾーンを中心に文化と美を体験・創造し発信する公園

②地球環境保全・再生に貢献する公園

③緑の中で人々が憩い活動し自然の美に感動する公園

④国内外から多くの人が訪れる公園

⑤健康づくりや多様なライフスタイルを実践できる公園

⑥全ての人が安心して快適に利用できる公園

⑦持続可能な運営・財務体制を有する公園

将来ビジョンの実現に向け、これまで大阪府は、太陽の塔の内部再生事業、1970年大阪万博50周年記念事業、万博の森づくりにおける生物多様性向上の取組み、万博記念公園駅前周辺地区活性化事業、指定管理者制度の導入等に取り組んできた。

将来ビジョンに掲げる、これら短期（2017年まで）及び中期（2020年まで）の取組みを実施した結果、継承前に約183万人だった自然文化園の来園者数も、2018年度末には約239万人まで増加する等、順調に公園の活性化が図られてきている。

しかしながら、長期（2040年まで）の取組みについては、今後、具体的な検討が必要であること、また、新型コロナウイルス感染症の感染拡大の影響により、来園者数についても2020年３月以降大きく減少、2020年度末時点では約135万人にまで落ち込んでいる。

さらに、2025年大阪・関西万博の開催や、新型コロナウイルス感染症の感染拡大による「新しい生活様式」への転換等、公園を取り巻く社会状況は、策定時から大きく変化した。

このため、長年にわたって守り育まれてきた万博のレガシーを次世代にしっかり継承していくとともに、公園のポテンシャルを最大限に発揮し、さらなる活性化を図り、世界第一級の文化・観光拠点を目指すべく、令和３年７月16日、新たな将来ビジョンの策定について、大阪府知事から本審議会に諮問がなされたのである。

**（１）万博公園を取り巻く社会状況の変化**

**①2025年大阪・関西万博**

2018年11月、「SDGsが達成される社会」を目指し、2025年大阪・関西万博という、世界規模のプロジェクトが再び大阪で開催されることが決定した。2025年大阪・関西万博は、「いのち輝く未来社会」をテーマに、大阪夢洲において2025年4月13日から10月13日にかけて開催される「未来社会の実験場」であり、2020年東京オリンピック・パラリンピック後の大阪・関西、そして日本の成長を持続させる起爆剤となることが期待されている。55年前の万博を記念する万博公園においても、2025年大阪・関西万博が大成功を収め、人類と地球が共生する新しい時代の象徴となることを目指し、力を尽くされたい。

また、これまで大阪で万博といえば、すなわち1970年大阪万博のことであったが、これからは２つの万博が存在することとなる。このため、1970年大阪万博を記念する万博公園として、これを契機に、改めてそのアイデンティティや魅力、すなわち「1970年万博とは何であったのか？」「1970年万博を記念する公園は、どうあるべきなのか？」を掘り下げ、取組みに反映していくことが最重要の課題となるであろう。

**②SDGs（持続可能な開発目標）**

SDGsは、2015年9月、国連サミットで採択された「持続可能な開発のための2030アジェンダ」に記載されている、持続可能でよりよい世界を目指す国際目標である。期限を2030年までとし、地球上の「誰一人取り残さない」ことを誓う、世界共通のゴールである。

SDGsはMDGs（ミレニアム開発目標）の後継であるが、MDGsは途上国の課題を先進国が支援する政府主導の取組みという色合いが強く、より良い世界の実現に向け、国際社会が一体となって取り組むことを求めるものであった。MDGsが、「歴史上最も成功した貧困撲滅運動」と評される成果をあげたことから、その成果の上に立ち、発展途上国のみならず、先進国自身も取り組む、ユニバーサル（普遍的）なゴールとして、SDGsが定められたのである。

このため、SDGsの達成に向けては、政府、NPO、企業、消費者など、多様なステークホルダーによる自主的、共同的、革新的な取組みが求められており、「誰一人取り残さない」「世界はつながっている」「私が起点」がSDGsのキーワードとされている。

現行の将来ビジョンにおいても、例えば「人と自然の調和」や「地球環境保全・再生に貢献する公園」等、SDGsの達成に資する目標等が掲げられているが、人類一人ひとりが「自分事」として、持続可能な未来に向けて取り組むことが求められているいま、これまで以上に、府民や社会、世界との関係性を重視する姿勢を打ち出すことが必要であろう。

**③新型コロナウイルス感染症**

2019年に発生した新型コロナウイルス感染症は、瞬く間に世界中で猛威をふるい、未来の持続可能性について、人類一人ひとりが、自分事として向かい合うきっかけとなり、期せずして、SDGs達成へのコミットメントを促すことともなった。

また、新型コロナウイルス感染症の感染拡大は「新しい生活様式」への転換を促しており、とりわけ、「働き方の新しいスタイル」の浸透、換言すれば「住まい方の変化」は、人々の生活のあり方に不可逆の変化を及ぼし、これに伴い、加速するDX（デジタルトランスフォーメーション）等への対応は、喫緊の課題となっている。

万博公園においても、「新しい生活様式」に基づき、来園者に安心安全を提供することは当然のこととして、「未来の実験都市」であった1970年大阪万博のDNAを受け継ぐ公園として、DXの導入等により、来園者サービスの向上等に、常にチャレンジし続けることが必要であろう。

**（２）将来ビジョンの振り返り**

次に、現行の将来ビジョンの振り返りを行い、その成果と新しい将来ビジョンへ盛り込むべき視点について見てみよう。

**①太陽の塔の内部再生事業　～「レガシーの継承、活用」という視点～**

太陽の塔の内部再生事業は、独立行政法人日本万国博覧会記念機構が着手し、大阪府が完成させた、「生命の樹」の再生事業である。現在、太陽の塔はメタセコイアの樹林に囲まれ、緑の中で悠然と屹立しているが、もともとは、1970年大阪万博のテーマプロデューサー岡本太郎が、来場者の頭上を覆う壮大な水平線、近未来の「空中都市」である大屋根をボカン！　と打ち破るために造った、「ベラボー」な太古の塔であった。

「人類の進歩と調和」ということばに違和感を覚え、「アンチ・ハーモニーこそ本当の調和」と考えるテーマプロデューサーが造り出したのは、未来都市を突き抜け、どんとそびえ立つ、太古の塔であった。会場のゲートキーパーでもあった「太陽の塔」は、来場者を胎内の地下、内部、そして空中へと導き、「過去（根源）」、「現在（調和）」、「未来（進歩）」とのであいを通して「神聖で強烈な人間的体験」を与える、”祭り”の中心地となった。太陽の塔の出現により、「人類の進歩と調和」という、いかにも西洋的な価値概念は、いにしえの日本の土俗的な生命力に内部から突き破られ、空前絶後の、ダイナミックな東洋的叡智へと変容したのである。

最初に岡本太郎に浮かんだビジョンは、人類の進化とエネルギーを象徴する「生命の樹」が巨大な屋根をつきぬける、というものであり、塔そのものを樹木として想定し、五大州を表わす五本の塔として地球全体を表現しようとするものであった。構想を磨き上げる中で、「生命の樹」は「太陽の塔」に収れんしたが、「生命の樹」は塔のアーキタイプであり、その基本理念を「集中的・象徴的にあらわしたもの」なのである。「太陽の塔」が象徴する、「根源から噴きあげて未来に向かう生命力」。このエネルギーこそが、「人類の文化であり、宇宙時代への可能性であり、進歩と調和を支える＜ひと＞それ自身の生きようとする意志」なのである。

過去から未来に向け、「太陽の塔」を一直線に貫く、圧倒的なエネルギーの流れ。アメーバからハ虫類、恐竜、人類へと至るすべての生命が織りなす、ひとつの生命体。すなわち、「生命の樹」の再生とは、「生命の再生」に他ならない。

「生命の再生」とは、過去を複製することではない。生命は、未知なる環境の変化を前に、過去の経験を知性に変換しながら、「瞬間、瞬間に生き」、未来を拓こうとする。一期一会の諦観のうえにたった、不屈のチャレンジ精神。この知性、エネルギー、意志があってこそ、1970年大阪万博という魅力的な人類の宝は、歴史の忘却からよみがえり、次世代をけん引するちからとなりうる。けだし、「生命の樹」の再生こそは、将来ビジョンの最大の成果であり、すべての人類のための誇らしい到達点なのである。

どのような厳しい環境の中におかれても、生命はさらに新たな生命を産み出し、限りない進歩を目指す意志をはらむ。このため大阪府には、「生命の再生」を軸として、1970年大阪万博のレガシー、すなわちテーマ「人類の進歩と調和」や「未来の実験都市」、「人類交歓の場」及び「万博芸術」という、万博DNAの再生を図り、「万博の森（自然環境）の再生」、そして1970年大阪万博100周年に向けた「万博公園の再生」へと、「生命」をつなげ「未来」を照らす道筋を歩んでいく意志を明らかにされたい。

**②万博の森づくり　～「持続可能な未来づくり」の継承という視点～**

万博の森は、緑を切り拓いて造った博覧会の跡地を、再び森として再生したものである。「緑」は生物の多様性を守るものとして、持続可能な未来をつくりだすために欠かせないものであり、万博記念公園基本計画において、次のように位置づけられている。

― 『緑』とは、人類の著しい技術進歩の中で忘れられ、失われつつある自然環境の総称として考えられる。今日、緑に求められるのは単に慰めではなく、人間の生活環境を維持することである。人間の活動と自然の緑の環境にはお互い調和した共存関係が必要であり、われわれの活動が瀕死に陥れた自然生態のいくつかを人間の知恵と技術によって復活させ維持する方法が緊急に追及されるべきである。そのためには長期の実験が必要となろう。 ―

この考え方に基づき、1972年から2000年までの長期プログラムが立てられ、「自立した森づくり」を目指した取組みが行われてきた。目指すべきは、「内外の都市化に対抗しても生き生きとしている森、多様な動植物と共存し安定している森（生物多様性に富んだ森）」である。当初の計画では、人為的な関与がなくとも、自然の遷移によって「自立した森」が形成されると考えられていたが、経年により樹種が減少し、次世代の樹が育っていないなど、森の再生に向けた実験を繰り返す中で、自立した森の実現には、人の関与が不可欠であることが明らかとなった。

　このため、将来ビジョンにおいて、毎年少しずつ人の手を加えて、長期的に生物多様性が豊かで、多様な景観を有する森へ転換を図ることとし、「万博の森育成等計画」（将来ビジョンを踏まえた森づくりのアクションプラン）を策定、「生物多様性の豊かな森」「人と自然がふれあえる森」を目指すべき森の姿と定め、４つの樹林タイプ（緩衝林、保全重視林、保全・利用林、利用重視林）での健全な森づくりを進めているところである。

かつて里山は、森林と人里のあわい（間）として、人が日常的に立ち入り、薪炭用材の伐採、落葉の採取、山菜採り等を行うことで、人々の生活を豊かにするとともに、人と野生動物の共生を担保し、台風や集中豪雨等の災害から人類を守る役割を果たしてきた。しかしながら、昭和30年代の燃料革命、化学肥料の普及等により、利用されずに放置されている「緑」が多いのが現状である。このような中、万博の森づくり、すなわち、弛みない実験の繰返しによる、自然環境の再生を目指す取組みは、人類の、また地球の未来にとってきわめて大きな意義を有するものといえる。現在では、たとえば大学の研究課題として取り上げられることの多い「万博の森づくり」であるが、持続可能な未来に向け、必ずしも専門職ではない人類一人ひとりに、その意味を理解してもらい、「森の再生」に積極的な参加を促されたい。併せて、持続可能な未来づくりに向けては、「未来の主役」である子どもたちにフォーカスした視点も重要であることを指摘しておく。

**③万博記念公園駅前周辺地区活性化事業　～「文化・スポーツのさらなる振興」という視点～**

万博記念公園駅前周辺地区活性化事業は、「大規模アリーナを中核とした大阪・関西を代表する新たなスポーツ・文化の拠点づくり」を推進する公民連携事業である。令和元年10月に公募を実施し、大阪府日本万国博覧会記念公園活性化事業者選定委員会により選定された提案は、最先端アリーナを中核とした「スマートシティのまちづくり」であった。18,000人を収容できる世界基準のアリーナと、それと相乗効果を発揮する、ホテル棟、商業施設棟、オフィス棟、共同住宅棟を段階的に整備するメガプロジェクトであり、計画どおり実現すれば、大阪・関西、ひいては西日本全体の起爆剤となることはまちがいない。活性化事業等と連携し、相乗効果を発揮するなど、万博公園の魅力向上に取り組むことにより、万博公園地域公園全体をさらに活性化されることを強く期待したい。

Ⅱ　新しい将来ビジョンのフレーム、目標と基本方針

これまでの本審議会の議論を踏まえ、新たな将来ビジョンのフレームについて整理を行う。

現在の将来ビジョンに掲げる、「**基本テーマ**：人類の進歩と調和」と「**基本理念**：緑に包まれた文化公園」は受け継いだレガシーに基づき、条例に規定された概念であり、当然、継承すべきものである。

「**目指すべき公園像**：緑と文化･スポーツを通じて人類の創造力の源泉である生命力と感性が磨かれる公園」についても、将来ビジョンの核心として、変更を議論する必要はないだろう。

一方、「**４つの目標**」及び「**７つの基本方針**」については、より万博公園らしいものとしてはどうか、という指摘を踏まえ、これまでの「ダイバーシティ＆インクルージョン（多様性と包摂性）」、「SDGs」、「スポーツ・文化の拠点」という論点を踏まえ、議論を深めていきたい。

**1　目標と基本方針**

目標と基本方針の議論を行うにあたり、「人類の進歩と調和」というテーマを踏まえ、人類が目指すべき普遍的な価値である、「真・善・美」をフレームワークとして、論点の整理を行った。

**人間性の尊重を通して、「調和をめざす進歩の精神」とつながる公園**

（ダイバーシティ＆インクルージョン）※これまでに議論された論点。以下同じ

**真**

**善**

**レガシーと万博の森が象徴する、「持続可能な未来」とつながる公園**

（SDGs）

**美**

**「最先端の文化・スポーツの拠点」として、国内外の人や施設とつながる公園**

（スポーツ・文化の拠点）

**（１）人間性の尊重を通して、「調和をめざす進歩の精神」とつながる公園**

**①万博公園のポテンシャル　「調和をめざす進歩の精神」**

**人類の進歩と調和**：人間性の尊重を通して、調和をめざす進歩の精神を、私たちは万国博の会場で実現したい。進歩と調和とは、両立しがたい矛盾を示すように見えるが、この難問をとく鍵は、生命それ自体の尊重の中に見出される。人種、国籍、性別、言語、信条、身分のいかんにかかわらず、人間はすべて平等であるということは、あらゆる人間がまず生命として尊重されねばならないということを意味する（「第７回テーマ委員会」茅誠司委員長ほか）

**お祭り広場：**日本の「お祭り」は、人々の心を結びつけ共同体としての意識を強める作用を持っている。陽気で楽しい。しかし、「お祭り」には哲学的な意味あいは薄い。西洋の「広場」は、市民が自由に利用できる場として、だれもが思うままに演説し、議論し、やはり市民の連帯感を強めてきた。しかし哲学的な意味はあっても楽しさは少ない。目的は同じであっても、機能は正反対。この二つがそろってこそ（万国博に）ふさわしい（「千里への道-日本万国博7年の歩み」前田昭夫）

**国立民族学博物館**：民博の展示は、20世紀における人類学的認識のひとつの到達点である文化相対主義を徹底的かつ総合的に展示に反映させたものとして、疑いなく世界でも最良のもののひとつであった。交流と越境と移動が常態となった現代の状況において、そうした状況に即した民族学博物館の展示の新たなありかたを求めるとすれば、それは双方向的・多方向的な交流の場、すなわち「フォーラム」として博物館を再編する以外にはないと考えられる。（「国立民族学博物館における展示基本構想2007」国立民族学博物館）

**②基本方針**

**すべての人が安心して多様性と包摂性に向けてつながる**

1970年大阪万博は、最先端のテクノロジーを競い合う場であり、また、光と音の芸術博であるとともに、何よりも生命の尊重、人間性の尊重を高らかにうたい上げる巨大な祭典であった。このため、万博公園の活性化に向けた取組みに通底するのは、多様性と包摂性という視点であるべき、と考える。万博公園は公の施設であり、現在でも平等利用の促進に努めているが、目指すべきは、あらゆる人種、国籍、性別、性的指向・性自認、障がいの有無、言語、信条、身分の人間が、安心安全の保証の下、「生命の再生」を図る人類交歓（コミュニケーション）の場である。

**③取組み案（今後検討）**※【】内はSDGsのゴールと対応（以下、同じ）

・誰もが安全安心に利用できる公園づくり【５,10,11,16】

DXの活用による障がいや言語等ハンディキャップの解消、スマートモビリティ、LGBTQトイレ、カラーユニバーサルデザイン等の取入れ等

・あらゆる人々とアクセスできる公園づくり【４,10,11】

ナショナル・デーやスペシャル・デーの再生、レインボーパレード、昔遊びやスポーツを通じた小学校単位でのシニアや外国人とのふれあい、オンライン観光やメタバース等

・ポストコロナにおける普段使いとしての公園づくり【４,11,12】

ワーケーション等、人々のニーズに応じた公園の利活用ができる環境整備等

**（２）レガシーと万博の森が象徴する、「持続可能な未来」とつながる公園**

**①万博公園のポテンシャル　「持続可能な未来の象徴」**

**人類の進歩と調和**：文明の進歩にもかかわらず、世界の各地域にはなお大きな不均衡がのこり、さまざまの不幸になやむ人々が決してすくなくはない。人類の理想とする進歩は、こうした弊害や不調和を伴わない「調和的進歩」でなければならない。（「第７回テーマ委員会」茅誠司委員長ほか）

**太陽の塔**：人間は進歩していない。逆に破滅に向かっているとおもう。調和といってごまかすよりも、むしろ純粋に闘いあわなきゃならない。けんかじゃない、うれしい闘い。アンチ・ハーモニーこそ本当の調和ですよ（「民博誕生」梅棹忠夫編／岡本太郎）

**万博の森**：人間の活動と自然の緑の環境には互いに調和した共存関係が必要であり、我々の活動が瀕死に陥れた自然生態系のいくつかを、人間の知恵と技術によって復活させ維持する方法が緊急に追及されるべきである（「万国博覧会記念公園基本計画報告書」日本万国博覧会記念協会編）

**②基本方針**

**人類の進歩と調和を実現するSDGs達成+beyondに向けてつながる**

1970年大阪万博のテーマは「未来への羅針盤」として、いまなおその輝きが失われることはない。また、「万博の森（自然環境）」は、人類の生存を可能とし、人類の創造力の発露である文化・スポーツ活動の根底となるものである。このため、「人類の進歩と調和」というテーマの下、多様な主体と連携する人類交歓（コミュニケーション）の場として、SDGs達成+beyondに向けた取組みを進め、人類と地球の「生命の再生」を図る。その際、項目を絞り込むべきという指摘を踏まえ、取り組むべきゴール（案）を次のとおり選定した。

４　教育、５　ジェンダー、７　エネルギー、９　インフラ、産業化、イノベーション、10　不平等、

11　持続可能都市、12　生産・消費、15　陸上資源、16　平和





**③取組み案（今後検討）**

・「生きている公園」のアイコンである、万博の森の再生・活用事業【４,11,12,15】

森の再生の意義の発信、森づくりボランティアの育成、オリエンテーリングやキャンプ、森林セラピーとして活用等

・子どもたちが自ら、自分たちの未来を考えるまちづくり【４,７,９,11】

未来のエネルギー、エコシステム、宇宙の平和的利用等をテーマとするSTEAM教育等

・子どもたちから高齢者まで、ウェルビーイングを実現できるまちづくり【４,11,12】

活性化事業や大阪大学等大学や研究機関、健都との連携等

**（３）「最先端の文化・スポーツの拠点」として、国内外の人や施設とつながる公園**

**①万博公園のポテンシャル　「最先端の文化・スポーツの拠点」**

**活性化事業との相乗効果**：アリーナができたときに、万博公園のサービスを少しグレードアップするだけでは足りない。「公園の広い空間の中で、桜の季節は桜を見て楽しい」という空間から1歩2歩進んでいかなければならない（大阪府日本万国博覧会記念公園運営審議会意見）

**万博芸術（アート）**：メディアアートやテクノロジーを使ったアートの芸術祭というのは大阪万博が発祥、もっとやればいい。パビリオンをあちこちに作るなどもいい。また、各時代の庭園を代表する日本庭園があるのだから、秀吉にならって、現代アーティストと組んで大茶会をやればインパクトがある（千利休、古田織部は当時の現代アーティスト）（同上）

**2025年大阪・関西万博とのつなぎこみ**：2025年に万博があるときに、万博公園がひとつのサテライトになるべきだと思っており、EXPO’70も含めた時間的な連続性、EXPO’70の思い出もあるし、これからの新しい文化・スポーツもあり、ただの公園プラス新しいものを作っていく場にしたい（同上）

**②基本方針**

**次世代型ライフスタイルのメッカに向けてつながる**

ポストコロナにおいては、文化・スポーツの存在感はますます高まり、アーバンスポーツの隆盛が示すとおり、文化とスポーツはますます融合していくとともに、人類交歓（コミュニケーション）のツールとして欠かせなくなると考えられる。2025大阪・関西万博の開催により、世界は再び大阪に注目することとなるが、そのインパクトを最大限に活かしながら、さらなる「都市の魅力の創出」に大胆に取り組み、「大規模アリーナを中核とした新たなスポーツ・文化の拠点」等との相乗効果を強力に推し進め、文化とスポーツが融合した、次世代型のライフスタイルのメッカとして、個人やコミュニティを支援し、「生命の再生」を図る。

**③取組み案（今後検討）**

・活性化事業の推進【９,11】

・日本庭園の更なる魅力向上、利用促進【４,８,11】

　 作庭意図を尊重し、自然との共生感や創意工夫された自然の造形美を体感できる空間整備・施設改修、ARを活用したガイドや呈茶・古典芸能・ライトアップなどの利用促進イベント等

・万博公園のポテンシャルを活かした新たな文化・スポーツ活動の場づくり【４,８,11】

2025大阪・関西万博との連携（いわゆるサテライト）、1970年大阪万博・万博公園をテーマとするアートフェスや仮設パビリオン、アーバンスポーツやバーチャルスポーツ等

**2　万博公園の「存在意義（パーパス）」**

これまで約半世紀の長きにわたり、万博公園は、太陽の塔等のレガシーを守りつつ、各種のスポーツ施設を含めた「緑に包まれた文化公園」として、府民をはじめとする多くの人々に愛され、利用されてきた。しかしながら、1970年大阪万博50周年を迎えようとするまさにそのとき、それまでの日常と予定調和の未来予測を根底から覆す、大規模なパンデミックが発生した。新型コロナウイルス感染症が浮き彫りにしたのは、世界は様々な差異を見せつつも、分かちがたく一体化しており、半世紀も前に岡本太郎が喝破したとおり、「同質の困難、同質の怖れ、同質の歎きにゆさぶられている」現実であった。

**ウィズコロナ、またポストコロナを見据え、1970年大阪万博を記念する万博公園は、府民や社会、世界とのかかわりにおいてどのような存在であるべきなのか？**

人類と地球の未来は、いまこの瞬間の選択にかかっている。同時に、現在を生きる我々には、若い世代が未来の世代に受け渡すたいまつに、火を灯す機会を与える義務がある。「人類の進歩と調和」を掲げた1970年大阪万博を記念する公園であり、また、「生命の再生」を成し遂げた万博公園には、持続可能な未来の実現に向け、公園の「**存在意義（パーパス）**」を明らかにする社会的な責務があると考える。

存在意義（パーパス）の議論にあたっては、太陽の塔や日本庭園、万博の森など有形のレガシーに加え、「人類の進歩と調和」等1970年大阪万博のスピリット、DNAという無形のレガシーをしっかりと守りつつ、エンパワーメントさせていく観点が重要となる。

さらに、社会状況の変化に的確に対応した公園の魅力づくりを進めるとともに、多様な主体が連携・協力し、持続可能な未来を目指すプラットフォームとして、「大規模アリーナを中核とした新たなスポーツ・文化の拠点」やEXPO CITY、市立吹田サッカースタジアム等とともに、万博公園地域全体のさらなる活性化に向けて取り組んでいく、“まちづくり”の観点も欠かせないと考える。

これらの観点を踏まえ、万博公園の存在意義（パーパス）を次のとおり設定した。

**レガシーを継承するとともにその再生を図り、持続可能な未来に向かうコミュニケーションの場として、**

**輝かしい多様性のうちに調和のある統一を世界に生み出す公園**

**３　公園の管理運営**

万博公園においては、日本万国博覧会記念公園事業特別会計を設置し、独立採算による自律的な公園運営が行われている。今後、大阪府は新たな将来ビジョンに基づき、さらなる魅力づくり等に向けた新たな投資を行っていくこととなるが、一方では、経年劣化に伴う公園施設の大規模修繕等は、計画的に実施していく必要がある。このため、引き続き、個々の事業効果をしっかりと検証するとともに、特別会計の収支や日本万国博覧会記念公園基金の状況について適切な見通しを立てながら、公園の管理運営を行っていくことが重要である。

Ⅲ　新しい将来ビジョンの目標年次、アクションプラン、達成状況の確認・評価

**１　次の50年をめざして**

ポスト50年の夢を語る新しい将来ビジョンは、1970年大阪万博100周年を見据えたものとしたい。また、活性化事業の事業期間も50年となっていることから、万博公園全体として相乗効果を生み出していくためにも、50年先の未来を視野に入れることが重要となる。

このため、2070年を視野に入れつつ、事業の具体的な展開を図る観点から、手触り感がもてる目標年次を設定することとし、SDGs達成の目標年次である2030年を結節点として、それまでの約10年間と、+beyondとしてその10年後の「2040年」を目標年次として設定することを検討されたい。

**２　アクションプランの作成及びKPIの設定**

一方で、具体的な取組みにおいては、DXの導入を積極的に導入することから、あまり長期の計画期間を設定すると、日進月歩する技術の進歩に対応できない。このため、新しい将来ビジョンの下に、「アクションプラン」を作成し、３～５年程度で更新する。具体的な施策については、Ⅱ章１（１）から（３）の「③取組み案」をもとに検討を進められたい。併せて、現行の将来ビジョンでは自然文化園の来園者数という単一の指標が設定されているが、新しい将来ビジョンの達成状況を確認・評価するため、具体的な施策を踏まえ、来園者数に加え、複数のKPIを検討されたい。

また、アクションプラン及びKPIについては、万博公園の管理運営が指定管理者制度に移行していることから、指定管理者とも十分協議を行うことはもちろん、万博公園全体に強い影響を与える、活性化事業の事業者とも密な連携を図りながら作成することが必要であろう。

Ⅳ　ロードマップ

**１　2030年に向けて**

**マイルストーン**：2023年８月（予定）のEXPO’70パビリオン別館オープン、2025年の大阪・関西万博開催、2027年秋（予定）の大規模アリーナ開業

「万博公園の再生」に着手、大阪・関西万博のインパクトを活かし、世界に万博公園の存在を打ち込む。

**２　2040年に向けて**

**マイルストーン**：2037年（予定）の活性化事業最終まちびらき（第4期）

「大規模アリーナを中核とした新たなスポーツ・文化の拠点」との相乗効果等を活かし、「万博公園の再生」を成し遂げ、アジアを代表する公園として、さらなる都市の魅力の創出を目指す。

※以上に引用した文章は、いずれも抜粋である

参考図書一覧

『日本万国博覧会公式記録（全３巻）』　日本万国博覧会協会　1972年

『日本万国博覧会公式ガイド』　日本万国博覧会協会　1970年

平野暁臣編著『大阪万博－20世紀が夢見た21世紀』　株式会社小学館クリエイティブ　2014年

平野暁臣編著『岡本太郎と太陽の塔』　株式会社小学館クリエイティブ　2008年

前田昭夫著『千里への道　－日本万国博７年の歩み』　万国博グラフ社　1970年